

研究ノート

アートに因んだ空間助成プロジェクト
—はたるの湯／フェリオ天神—

Report on project of a space closely connected to art
— Hotaruno Yu / Felio Tenjin —

P23-27

黄 禧晶

HWANG Hei Jeong

造形芸術学科

1. はじめに

私はアートが持つ力の社会における発信力やそのアートが社会にどのように貢献できるかについて研究を続けてきた。近年取り組んでいるパブリックアート（Public Art）はその研究の一環であり、私の専門分野である「絵画」をパブリックアートと結びつけ、能動的な発信源としてのアートの力についての研究である。それは内的表現に留まりがちな絵画的言語を「社会と共に生きる言語」として、「コミュニケーションの手段」としてのアートの在り方への模索である。

パブリックアートは社会をより美しくするという観点を含め、長年の研究課題であるアートセラピー（Art therapy）の観点からも注目すべきである。この紙面を借りて紹介するR6年度の各プロジェクトは特にアートセラピーの社会における役割に重点を置いて行われたものである。

2. アートに因んだ空間助成プロジェクトの実践例

2-1 糟屋郡須恵町社会福祉センターほたるの湯でのアートプロジェクト

代表研究者：黄 禧晶

（九州産業大学造形短期大学部教授）

共同研究者：田 承憐

（九州産業大学芸術学部教授）

協力：糟屋郡須恵町役場

◆研究領域：パブリックアートによる地域活性化プロジェクト（学部間共同研究）

◆研究プロジェクト概要

R6年度KSU基盤研究費：アートに因んだ空間助成プロジェクト

◆プロジェクト実施場所：福岡県糟屋郡須恵町上須恵

1167-3社会福祉センターほたるの湯

◆研究におけるプロセス

- ・R5年11月にプロジェクトを立案し、12月にR6年度KSU基盤研究費を申請する。
- ・R6年2月に基盤研究費を獲得し、須恵町役場との具体的なプロジェクト実行詳細について打ち合わせをスタートする。
- ・実行詳細が固まり芸術学部の田教授との役割分担を決める。
- ・具体的なデザイン案を決め、先方との打ち合わせを重ねて案を固める。
- ・R6年度9月、10月にプロジェクトを実行する。
- ・R6年度KSU VISION DAYで本プロジェクトの発表を行う。

本研究は昨年の糟屋郡オアシス篠栗での「インスタレーションによる空間改善プロジェクト」で共同研究を行った九州産業大学芸術学部の田承憐教授ともう一度協力し合っ

た。ほたるの湯を選定した。ほたるの湯は2020年本学の学外アートプロジェクトで露天風呂の内外で壁画を制作したこともあり、私にとっては親しみのある施設である。伝統ある町の名所でありながらも、古いイメージが強く、老朽化が進んでいる。須恵町は近年大型店舗や新築などが増えており、若い世代の住民が増える傾向である。その年齢層に受け入れられるようなイメージに変えていくことで様々な年齢層の利用客も増えていくとの考えに至った。私の専門分野である絵画を通しての空間助成としてはエントランス正面の壁画、休憩ルームでのアート制作を行うことにした。田教授は銭湯入口の巨大のれんや男女湯入口やトイレののれん、男女湯のサイン制作を行うことにした。又、のれんのデザインに入れる「ほたるの湯」という文字は造形短期大学の学生に依頼し制作した。

エントランスの壁画は私1人で担当した。既存設置してある蛍の彫刻や絵を壊さずに活かすようなデザインとし、イメージを描き加えたものととどめた。施設側の要望として施設名の「ほたるの湯」のイメージをよりはっきり伝えてインパクトあるものにして欲しいとの事であったため、蛍の光を清涼感あるように表現した。しかし、施設の壁がかなり凹凸が激しく、絵の具の垂れで慎重に制作を進めることに苦労を重ねていた。襖のデザインは施設名の「ほたる」のイメージを幻想的で美しく伝えるようなイメージにするため青を基調とする夜の光景とし、絵画専攻の2年生3名と研究生1人が担当した。休憩ルームのブラインドや壁のアートは1年生が主に担当し、襖の制作を終えた2年生達が加わり、時間内に完成することが出来た。

今回の壁画などは1日で完成することを決めていて、時間的な余裕はあまりなかったものの、絵画専攻の学生を中心に行ったことで工程を進めることに大きな問題は生じていなかった。

芸術学部の田先生が主に担当したのれん制作は当初の予定から工程の関係で少し延びて10月に設置を行った。消防法に関わることで防煙処理をするなどを徹底した。イラストのデザインは芸術学部が担当したが、イラストに加わる「ほたるの湯」という文字は造形短期大学の2年生に依頼し制作してもらった。年配の方に好まれる和風のデザインに、須恵町の象徴である鶯谷のイラストを加えた複数ののれんの他に、銭湯入口の巨大のれんには若者に受けられる現代風のイラストとし、迫力ある美しいデザインへと生まれ変わった。

今回の共同研究を通してそれぞれの学部の強みや専門分野を考慮した役割分担の重要性やコミュニケーション力を実感できたと共に、地域、社会のためのアートの在り方、アートの力を改めて発現できた。



(図1) エントランス側集合



(図2) 襖側 集合



(図3) エントランス壁画制作過程



(図4) 襖制作1



(図5) 襖制作2



(図6) ブラインドアート制作



(図7) 休憩ルーム完成図1



(図8) 休憩ルーム完成図2



(図9) のれん設置光景



(図10) はたるの湯入口のれん設置後



(図11) 脱衣所のれん設置後



(図12) 脱衣所男湯のれん設置後



(図13) 脱衣所女湯のれん設置後



(図14) Vision day 展示光景

2-2 福岡市中央区老人ホームフェリオ天神でのアート展示プロジェクト

研究者：黄 禧晶（九州産業大学造形短期大学部教授）

協力：老人ホームフェリオ天神／
産学共創・研究推進本部

◆研究領域：アートに因んだ空間助成プロジェクト

◆研究プロジェクト概要

R 6 年度受託研究費

◆プロジェクト実施場所：福岡市中央区西中洲11-25 フェリオ天神

◆研究におけるプロセス

- ・R 6 年10月にフェリオ天神との打ち合わせを通して要望事項の聴取を行う。
- ・R 6 年11～12月に現地打ち合わせを重ねてプロジェクトの具体的な案を練る。
- ・R 7 年1月に展示プロジェクト実行・飾り付けを行う。
教員1名3点（洋画）
2年生3名3点（洋画、イラスト、デジタルイラスト）
1年生5名6点（洋画、書、フィギュア）
- ・今後他プロジェクトに繋げて更に展開していく。

本研究は中央区西中洲に位置する老人ホームフェリオ天神からの依頼で行われたものである。フェリオ天神は認知症ケアを大切にしたいと考えており、そのためいろんなプログラムを計画、実施している。しかし、天神という利便性はあるものの、灰色のビルに囲まれ、心を癒せる環境とは程遠い現実問題があるという。そこで一階のロビーをアートの空間としたいとの要望があり、今回の展示プロジェクトの実行に至った。10m程度の壁面積を頂いたので早速作品募集を行い8名の学生の作品が決まった。尚、今回のプロジェクトは学外アートプロジェクトとし、学生の単位取得まで繋げるように企画した。教員3点、学生9点の作品を展示し（内訳は別記載）、半年間の展示を予定している。今回の展示で少しでもアートに触れる機会が増え、心の癒しの空間として施設が生まれ変わることを期待する。それがアートセラピーに直結することになるのであろう。本プロジェクトは単発に終わるのではなく、定期的な作品の入れ替えを考えている。また、展示プロジェクトのみならず似顔絵制作などのイベントも企画しており、入居者との触れ合いの機会を増やす予定である。R 7 年度のKSU 基盤研究費の申請をしており、採択が決まれば壁画やアートに因んだサインなどの制作を行う予定である。一つのきっかけで始まった取り組みが様々な形として発展して行き、益々アートの力で生まれ変わる空間となることが期待出来る。



（図1）準備光景



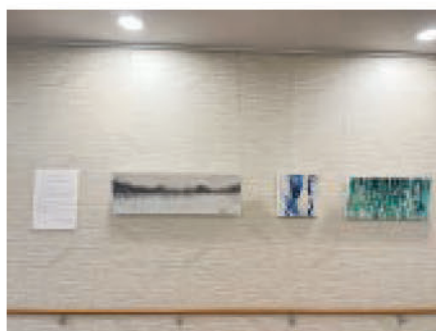
（図2）作品設置1



（図3）作品設置2



（図4）作品設置3



（図5）黄作品正面側



（図6）展示完成裏口側



(図7) 展示完成書側



(図8) フェリオ天神入居者との集合写真

3. まとめ

2015年の小さな取り組みからスタートした、アートを通じた様々な実践が、限られた人に留まらず、多くの人々を結ぶ大きな力になっているのではと、毎回のプロジェクトを実行し終える度に感じている。制作に参加する学生も2年間の短い時間で卒業してしまうが、卒業してからもその経験を活かして社会に貢献出来る人材になって行くことがプロジェクトを呼び掛けたものとして非常に喜ばしい事である。尚、縦横のつながりが出来、アートを愛する人々とのコミュニケーションの場にもなっている。更に地域の声援や関心で新たなアートの発展に繋がりがつつある。R7年度もいくつかプロジェクトが決まっており、私は需要がある限り、全力を注いで取り組んでいきたい。